雛がたり

泉鏡花

青空文庫

雛――女夫雛は言うもさらなり。桜雛、柳雛、花菜の雛、桃の花雛、白と緋と、紫の色の菫雛。鄙には、つくし、鼓草の雛。相合傘の春雨雛。小波軽く袖で漕ぐ浅妻船の調の雛。五人囃子、官女たち。ただあの狆ひきというのだけは形も品もなくもがな。紙雛、島の雛、豆雛、いちもん雛と数うるさえ、しおらしく可懐い。

黒棚、御廚子、三棚の堆きは、われら町家の雛壇には些と打上り過ぎるであろう。箪笥、長持、挟箱、金高蒔絵、銀金具。小指ぐらいな抽斗を開けると、中が紅いのも美しい。一双の屏風の絵は、むら消えの雪の小松に丹頂の鶴、雛鶴。一つは曲水の群青に桃の盃、絵雪洞、桃のような灯を点す。……ちょっと風情に舞扇。

白酒入れたは、ぎやまんに、柳さくらの透模様。さて、お肴には何よけん、あわび、さだえか、かせよけん、と栄螺蛤が唄になり、皿の縁に浮いて出る。白魚よし、小鯛よし、緋の毛氈に肖つかわしいのは柳鰈というのがある。業平蜆、小町蝦、飯鮹も憎からず。どれも小さなほど愛らしく、器もいずれ可愛いのほど風情があって、その鯛、鰈の並んだ処は、雛壇の奥さながら、竜宮を視るおもい。

（もしもし何処で見た雛なんですえ。）

いや、実際六、七歳ぐらいの時に覚えている。母親の雛を思うと、遥かに竜宮の、幻のような気がしてならぬ。

ふる郷も、山の彼方に遠い。

いずれ、金目のものではあるまいけれども、紅糸で底を結えた手遊の猪口や、金米糖の壷一つも、馬で抱き、駕籠で抱えて、長い旅路を江戸から持って行ったと思えば、千代紙の小箱に入った南京砂も、雛の前では紅玉である、緑珠である、皆敷妙の玉である。

北の国の三月は、まだ雪が消えないから、節句は四月にしたらしい。冬籠の窓が開いて、軒、廂の雪がこいが除れると、北風に轟々と鳴通した荒海の浪の響も、春風の音にかわって、梅、桜、椿、山吹、桃も李も一斉に開いて、女たちの眉、唇、裾八口の色も皆花のように、はらりと咲く。羽子も手鞠もこの頃から。で、追羽子の音、手鞠の音、唄の声々。

……ついて落いて、裁形、袖形、御手に、蝶や……花。……

かかる折から、柳、桜、緋桃の小路を、麗かな日に徐と通る、と霞を彩る日光の裡に、何処ともなく雛の影、人形の影が徜※う、……

朧夜には裳の紅、袖の萌黄が、色に出て遊ぶであろう。

――もうお雛様がお急ぎ。

と細い段の緋毛氈。ここで桐の箱も可懐しそうに抱しめるように持って出て、指蓋を、すっと引くと、吉野紙の霞の中に、お雛様とお雛様が、紅梅白梅の面影に、ほんのりと出て、口許に莞爾とし給う。唯見て、嬉しそうに膝に据えて、熟と視ながら、黄金の冠は紫紐、玉の簪の朱の紐を結い参らす時の、あの、若い母のその時の、面影が忘れられない。

そんなら孝行をすれば可いのに――

鼠の番でもする事か。唯台所で音のする、煎豆の香に小鼻を怒らせ、牡丹の有平糖を狙う事、毒のある胡蝶に似たりで、立姿の官女が捧げた長柄を抜いては叱られる、お囃子の侍烏帽子をコツンと突いて、また叱られる。

ここに、小さな唐草蒔絵の車があった。おなじ蒔絵の台を離して、轅をそのままに、後から押すと、少し軋んで毛氈の上を辷る。それが咲乱れた桜の枝を伝うようで、また、紅の霞の浪を漕ぐような。……そして、少しその軋む音は、幽に、キリリ、と一種の微妙なる音楽であった。仲よしの小鳥が嘴を接す時、歯の生際の嬰児が、軽焼をカリリと噛む時、耳を澄すと、ふとこんな音がするかと思う、――話は違うが、（ろうたけたるもの）として、（色白き児の苺くいたる）枕の草紙は憎い事を言った。

わびしかるべき茎だちの浸しもの、わけぎのぬたも蒔絵の中。惣菜ものの蜆さえ、雛の御前に罷出れば、黒小袖、浅葱の襟。海のもの、山のもの。筍の膚も美少年。どれも、食ものという形でなく、菜の葉に留まれ蝶と斉しく、弥生の春のともだちに見える。……

袖形の押絵細工の箸さしから、銀の振出し、という華奢なもので、小鯛には骨が多い、柳鰈の御馳走を思出すと、ああ、酒と煙草は、さるにても極りが悪い。

其角句あり。――もどかしや雛に対して小盃。

あの白酒を、ちょっと唇につけた処は、乳の味がしはしないかと思う……ちょっとですよ。

――構わず注ぎねえ。

なんかで、がぶがぶ遣っちゃ話にならない。

金岡の萩の馬、飛騨の工匠の竜までもなく、電燈を消して、雪洞の影に見参らす雛の顔は、実際、唯瞻れば瞬きして、やがて打微笑む。人の悪い官女のじろりと横目で見るのがある。――壇の下に寝ていると、雛の話声が聞える、と小児の時に聞いたのを、私は今も疑いたくない。

で、家中が寝静まると、何処か一ケ所、小屏風が、鶴の羽に桃を敷いて、すッと廻ろうも知れぬ。……御睦ましさにつけても、壇に、余り人形の数の多いのは風情がなかろう。

但し、多いにも、少いにも、今私は、雛らしいものを殆ど持たぬ。母が大事にしたのは、母がなくなって後、町に大火があって皆焼けたのである。一度持出したとも聞くが、混雑に紛れて行方を知らない。あれほど気を入れていたのであるから、大方は例の車に乗って、雛たち、火を免れたのであろう、と思っている。

その後こういう事があった。

なおそれから十二、三年を過ぎてである。

逗子にいた時、静岡の町の光景が見たくって、三月の中ばと思う。一度彼処へ旅をした。浅間の社で、釜で甘酒を売る茶店へ休んだ時、鳩と一所に日南ぼっこをする婆さんに、阿部川の川原で、桜の頃は土地の人が、毛氈に重詰もので、花の酒宴をする、と言うのを聞いた。――

―阿部川の道を訊ねたについてである。――都路の唄につけても、此処を府中と覚えた身には、静岡へ来て阿部川餅を知らないでは済まぬ気がする。これを、おかしなものの異名だなぞと思われては困る。確かに、豆粉をまぶした餅である。

賤機山、浅間を吹降す風の強い、寒い日で。寂しい屋敷町を抜けたり、大川の堤防を伝ったりして阿部川の橋の袂へ出て、俥は一軒の餅屋へ入った。

色白で、赤い半襟をした、人柄な島田の娘が唯一人で店にいた。

――これが、名代の阿部川だね、一盆おくれ。――

と精々喜多八の気分を漾わせて、突出し店の硝子戸の中に飾った、五つばかり装ってある朱の盆へ、突如立って手を掛けると、娘が、まあ、と言った。

――あら、看板ですわ――

いや、正のものの膝栗毛で、聊か気分なるものを漾わせ過ぎた形がある。が、此処で早速頬張って、吸子の手酌で飲った処は、我ながら頼母しい。

ふと小用場を借りたくなった。

中戸を開けて、土間をずッと奥へ、という娘さんの指図に任せて、古くて大きいその中戸を開けると、妙な建方、すぐに壁で、壁の窓からむこう土間の台所が見えながら、穴を抜けたように鉤の手に一つ曲って、暗い処をふっと出ると、上框に縁がついた、吃驚するほど広々とした茶の間。大々と炉が切ってある。見事な事は、大名の一たてぐらいは、楽に休めたろうと

思う。薄暗い、古畳。寂として人気がない。……猫もおらぬ。炉に火の気もなく、茶釜も見えぬ。

遠くで、内井戸の水の音が水底へ響いてポタン、と鳴る。不思議に風が留んで寂寞した。

見上げた破風口は峠ほど高し、とぼんと野原へ出たような気がして、縁に添いつつ中土間を、囲炉裡の前を向うへ通ると、桃桜滲と輝くばかり、五壇一面の緋毛氈、やがて四畳半を充満に雛、人形の数々。

ふとその飾った形も姿も、昔の故郷の雛によく肖た、と思うと、どの顔も、それよりは蒼白くて、衣も冠も古雛の、丈が二倍ほど大きかった。

薄暗い白昼の影が一つ一つに皆映る。

背後の古襖が半ば開いて、奥にも一つ見える小座敷に、また五壇の雛がある。不思議や、蒔絵の車、雛たちも、それこそ寸分違わない古郷のそれに似た、と思わず伸上りながら、ふと心づくと、前の雛壇におわするのが、いずれも尋常の形でない。雛は両方さしむかい、官女たちは、横顔やら、俯向いたの。お囃子はぐるり、と寄って、鼓の調糸を緊めたり、解いたり、御殿火鉢も楽屋の光景。

私は吃驚して飛退いた。

敷居の外の、苔の生えた内井戸には、いま汲んだような釣瓶の雫、――背戸は桃もただ枝の中に、真黄色に咲いたのは連翹の花であった。

帰りがけに密と通ると、何事もない。襖の奥に雛はなくて、前の壇のも、烏帽子一つ位置のかわったのは見えなかった。――この時に慄然とした。

風はそのまま留んでいる。広い河原に霞が流れた。渡れば鞠子の宿と聞く……梅、若菜の句にも聞える。少し渡って見よう。橋詰の、あの大樹の柳の枝のすらすらと浅翠した下を通ると、樹の根に一枚、緋の毛氈を敷いて、四隅を美しい河原の石で圧えてあった。雛市が立つらしい、が、絵合の貝一つ、誰もおらぬ。唯、二、三町春の真昼に、人通りが一人もない。何故か憚られて、手を触れても見なかった。緋の毛氈は、何処のか座敷から柳の梢を倒に映る雛壇の影かも知れない。夢を見るように、橋へかかると、これも白い虹が来て群青の水を飲むようであった。あれあれ雀が飛ぶように、おさえの端の石がころころと動くと、柔かい風に毛氈を捲いて、ひらひらと柳の下枝に搦む。

私は愕然として火を思った。

何処ともなしに、キリリキリリと、軋る轅の車の響。

鞠子は霞む長橋の阿部川の橋の板を、あっちこっち、ちらちらと陽炎が遊んでいる。

時に蒼空に富士を見た。

若き娘に幸あれと、餅屋の前を通過ぎつつ、

――若い衆、綺麗な娘さんだね、いい婿さんが持たせたいね――

――ええ、餅屋の婿さんは知りませんが、向う側のあの長い塀、それ、柳のわきの裏門のあ

りますお邸は、……旦那、大財産家でございましてな。つい近い頃、東京から、それはそれは美しい奥さんが見えましたよ――

何とこうした時は、見ぬ恋にも憧憬れよう。

欲いのは――もしか出来たら――修紫の源氏雛、姿も国貞の錦絵ぐらいな、花桐を第一に、藤の方、紫、黄昏、桂木、桂木は人も知った朧月夜の事である。

照りもせず、くもりも果てぬ春の夜の……

この辺は些と酔ってるでしょう。

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集　川村二郎編」岩波文庫、岩波書店
　　1987（昭和62）年9月16日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二七巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月
初出：「新小説」
　　1917年（大正6年）3月
入力：砂場清隆
校正：松永正敏
2000年8月30日公開
2005年3月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雛がたり

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/